

レマルク「西部戦線異状なし」と戦争文学

古 賀 保 夫

I

戦争は人間の生活に極限状況をもたらすことから文学の好テーマとなり得る。それにも拘わらず、戦争は緊張と残忍と惨景の連続であるため戦争を首題とした作品には美的要素に欠けるところがあり、従って一時的な題目に墮り易い。しかし、その内容が好戦、反戦、記録のいずれにモチーフをおくかを問わず、それは社会的・政治的であり、かつ人間思惟の本質にも関連する。とくに戦争文学がその時代の人間生活に及ぼす多大の影響を思うとき、それは社会観、世界観の問題まで提供し得る。このような性格をもつ戦争文学が世界の注目を浴びたのは第一次大戦からではないだろうか。それは世界的規模にまで拡大した戦争は第一次大戦をもって初めとしたことと無関係ではあるまい。「第一次大戦が残した現実の風景、あの破壊された台地、えぐられた野原の傷跡は、1939年から45年にかけて第二次大戦が残した傷跡よりずっと深い」（G. スタイナー「青鬚の城にて——戦文学の時代に」）ものであったことを思えば、それも当然のことである。さらに現代の戦争は中世近世の戦争様相と異なり一対一の英雄対決の存在を許さぬこと、戦争参加が国民全体に及び、戦闘行為の大部分は兵卒であることが特長的である。このため戦争小説は社会・政治への批判となり得るようになった。（第一次大戦のころ「ドイツの作戦家として名高いルーデンドルフが総力戦をとらえた。交戦国は長期に亘る消耗戦に耐えるため国民の総力を軍需品の生産と前線）への「人的資源」の供給に注いだ。」（遠山、今井、藤原「昭和史」岩波新書）そこにはまた哲学的な意義が内包されてくる。

かかる哲学的傾向を一般的に具備したドイツ国民は、周知の通り第一次

大戦の緊迫性をつぶさになめたことと相まって戦争文学がフランスとともに花咲いた。（なおフランスでは第二次大戦下ほど詩人が輩出したときはなかったといわれている。それは対独レジスタンス続行のとき、ドイツ秘密警察の追及を避けるためでもあった。作家詩人による「国民作家評議会」の結成、秘密出版「深夜叢書」Editions de Minuit の発行はそれを物語っている。なかでもアラゴン Louis Aragon の「断腸」詩集 *Le crève-cœur*, 「エルザの瞳」*Les yeux d'Elsa*, ヴェルコール Vercors の「海の沈黙」*Le silence de la mer*, のほかエリュアールの詩集「詩と真実」, ピエール・エマニュエルの「オルフェの墓」などは著名である。）

さてドイツの戦争文学は大別して前後三期にわたっている。初期は第一次大戦勃発前後で浪漫主義、自然主義の影響下にあったものでカイザー (Georg Kaiser 1878~1945) 「カレーの市民」*Die Bürger von Calais*—1914, 「兵卒田中」*Der Soldat Tanaka*—1940, ハウプトマン (Karl Hauptmann—1885~1921) 「戦争」*Krieg*—1914などがあるが、これは自然主義的作品で、戦死者の犠牲的精神が讃美されたり、各国の侵略主義批判が主な内容となった。このうち、G. カイザーの「兵卒田中」は日本軍隊に取材した反戦小説という点で異色であった。

第二期は大戦の結果として生じたもので表現主義運動に大きな足跡を残した。ゲーリング (Reinhard Goering 1887—1936) 「海戦」*Seeschlacht*—1917, ツヴァイク (Stefan Zweig 188~1942) 「エレミヤ」*Jeremias*—1917, トラー (Ernst Toller 1893~1939) 「変転」*Die Wandlung*—1919, 「ヒンケマン」*Hinkemann*—1923 のほか革命後の初代バイエルン共和国首相アイスナー (Kurt Eisner—1867~1919) やゲオルゲ (Stefan George—1917~) の詩「戦争」, ヴェルフェル (Franz Werfel—1890~1945) の「トロヤの女達」*Die Troerinnen*—1913 などがある。时期的には1910~1920年間でゲーリングは「海戦」で男性的に義務に殉ずる戦闘員を主人公としており、ツヴァイクは「エレミヤ」で戦争の仮面と虚偽を叫ぶ主人公エレミヤを登場させ、トラーは人類愛からの戦争観を書き、「ヒンケマン」では個人の反戦意識を祖上に乗せると同時に社会不安におのの

く労働者を取りあげている。

この時期を経て新即物主義が台頭した。前二期にくらべて、より現実凝視にあふれ、現実意識を土壌とした文学であり、報告体の文学が残った。その報告体は単純な事実の列挙ではなく、人間の内部からほとぼしった作品となった。報告的正確さが加わっていた。この時期の二大代表作としてはカロッサ（Hans Carossa 1878～1956）「ルーマニア日記」 *Rumänisches Tagebuch*—1924 とレマルク（Erich Maria Remarque：本名 Erich Paul Remarque 1898, 6.22～1970.9.25）「西部戦線異状なし」 *Im Westen nichts Neues*—1929 が挙げられる。カロッサの作は戦闘中も冷徹な心を失わない一軍医の数十時間の記録で、まことに調和のとれた芸術作品と評され得るもので、戦いを運命として受けとめ、誇張も批判も非難も愚痴もなく、淡々とした叙述がある。戦いの残虐さはなく人間の落ちつきと平静調和がある。レマルクの作品は、これと対照的で、筆致の新らしさ戦闘の悲惨さ、そして一方では笑いも織りまぜた日常をとり混ぜて、感傷的な個所もある。しかしいまレマルクの作品について論を進めるのは、同書が刊行僅か一カ年半で敵国にさえ賛同者を得て25カ国語に訳され、350万部を売りつくし、作者を一躍世界的な作家に押し上げたということもさることながら、作中に戦闘の本体がにじみ出ており、現在でもなお一読に価する内容を備えていると考えられるからである。これは第一次大戦に参加した作者自身の体験があずかって力があると思える。この体験も手伝ってルポルタージュ作品が独立した意味をもってきている。

思うに戦争は人間ひとりひとりの体験が総合されたものである。その全体像を描くには、この無数ともいえる体験の集積が不可避である。だが戦闘に参加し死亡した人に口を開かせることはできない。ために戦争全体を掴むことは不可能ではないか、という疑問が残る。これに答えるには生き残った者がその体験を一般化し再現する他はあるまい。そうしてこそ戦争全参加者の体験に近づくことが出来るだろう。また戦争の実体を知るためには、かかる作品に接する必要がある。この点レマルクの「西部戦線異状なし」は戦争の典型的事象をとらえているし、死んだ人間の代弁でもある

ため、さきの設問に答えうる作品の一つである。ただこの場合、留意しておかねばならぬ点がある。それは作品の受け止め方によって精神論に墮す危険と、必要悪としての戦争観である。ジェルジュ・ルカーチ (G. Lukacs 1885~1971) はつぎのように指摘している。「……戦争の残害だけが表現される場合である。(これら一戦争小説—の小説のうち最上のもの、例えばレン L. Renn「戦争」Krieg「戦後」Nachkrieg の作者やレマルクのものもそうである) そして戦争のこのような無意味さ、このような恐怖の人的代償として前線の生活にともなう道徳的価値(戦友愛、連帯性)が示されると、戦争への恐怖のために書かれた映像の中に——平和時代の日常生活の利己主義にくらべると——戦争を精神的に魅力あるものにさえしかねないようなあるものが生れてくる」(「ドイツ文学小史——第11章ワイマール共和国の文学」岩波書店)

(注) 「……いま戦争・革命・戦後の体験を素材とするにいたってはじめて重要な作家になった二、三の名前をあげるだけでも、トゥホルスキー、ケストナー、レマルク、ファラダがこれにはいる」(長橋梶野訳カウフマン「ドイツ現代文学批判」第11章革命以後——ミネルヴァ書房)

Ⅱ

Im Westen nichts Neues を書くに当ってレマルクは、同作品の扉に

Dieses Buch soll weder eine Anklage noch ein Bekenntnis sein. Es soll nur den Versuch machen, über eine Generation zu berichten, die vom Kriege zerstört wurde—auch wenn sie seinen Granaten entkam. —

この書は泣きごとでも、告白でもない。それは、よし砲弾からは逃れたとしても、戦争で破壊された、ある世代についての報告にすぎない。

と認めた。高尚深刻な思弁解釈は不用というより許し難い、という考えがこの扉の背後にある。

(注) 作品の対象の場は第一次大戦の西部戦線である。同大戦は1914年6月勃発、1917年3月以降は東部戦線がロシア革命により状態変化、西部戦線が決定的なものとなった。「ドイツ軍は1918年3—7月大攻勢を行なったが、8月連合軍の攻撃に支えきれなくなり、11月休戦となった。この間戦死者は400万

人、戦傷者2,200万人、非戦闘員も1,000万人死亡した。しかしドイツ軍は一時パリの東50キロまで迫っていた。そうしてヴェルダン、ソンムの戦いでドイツ軍は50万を失い西部戦線でのドイツの勝利は見込がなくなった。……こうして戦争の長期化に伴い国内経済状態は悪化しはじめ、工業生産性は1915年に前年比3分の1、16年暮には前線の弾薬欠乏を解消するため、いわゆる「ヒンデンブルグ計画」によって15—60歳の男子が徴用され軍需工場に送り込まれた。」（林健太郎ドイツ史一第6章第6節 山川出版）。国内状況は全く「ひどい世の中」となっていたが、第一次大戦は後で述べるように現代のはじまりでもあった。

作品の中心人物は作者自身と思われる20歳の学徒兵ポール Paul のほか、ボイマーとその3人の級友である。「ゆっくり寝るといことは思いもよらぬ」戦線で人間社会の破産を体験する。大人の、というのは現存社会における権威の存在には、それなりの理解と人間的知識を結びつけた上で人間観をもっていたのだったが、ひとたび砲火の下をくぐると、それが誤まりであったことを知る。

Mit dem Begriff der Autorität, dessen Träger sie waren, verband sich in unseren Gedanken größere Einsicht und menschliches Wissen. Doch der erste Tote, den wir sahen, zertrümmerte diese Überzeugung. (I—S. 18)

彼らがもっていた権威の概念に大きな洞察と人間的知識を結びつけていた。ところがこの確信も最初の戦死者を見たとき、霧散した。

この体験から「あんな連中は単に空虚な文句を並べて、巧妙にごまかすことが上手であったにすぎぬこと」を兵士ポウルは理解する。既成の道徳観が無用になったのを20歳の兵士は悟ってしまふ。大人の世界が呑み込め、かくて急速に老けて行く。

Eiserne Jugend. Jugend! Wir sind alle nicht mehr als zwanzig Jahre. Aber jung? Jugend? Das ist lange her. Wir sind alte Leute. (I—S. 24)

鉄の青春！ 我らはみな二十歳を越えていない。だがしかし、若さとは、青春とは何か？、そんなものは遠い彼方だ。我らは年をとっているのだ。

そして「荒涼たる人間」になった自己を省察する。

(注1) 「鉄の青春」とレマルクは書いているが、これは鉄の時代、つまり黄金時代に対する荒廃の時代に生きる青春と考えられる。

(注2) 「……とにかく戦争は、まだ純粋な市民精神を信じていた作家の姿勢を政治化した。……冷酷な幻滅、おそろしい血の犠牲と苦悩を体験したのち欺瞞的な熱狂にかわって真剣な思考がはじまる」(カウフマン「ドイツ現代文学批判——危機と変革第6章文学革命」)

このような急激な人間意識の変化には驚ろくほかないが、殺すか殺されるかの絶対境に立たされた場合、自己をその場に追いつめた世界への鋭敏な直視が生ずるのは、むしろ自然的な生物的反応であろう。そうしてポウルは過去の学校教育を批判するに至る。それが「僅か十週間の軍事教練で決定づけられた。郵便配達上りの金筋をもつ権力が両親の力より大きい」(その2)のを体得する。

Wir lernten, daß ein geputzter Knopf wichtiger ist als vier Bände Schopenhauer. . . Zuerst erstaunt, dann. . . erkannten wir, daß nicht der Geist ausschlaggedend zu sein schien, sondern die Wischbürste, nicht der Gedanke, sondern der Drilll. . . . unsere Erzieher und sämtliche Kulturkreise von Plato bis Goethe zusammen. (II—S. 27~28)

四巻のショーペンハウアーよりも、ピカピカした一個のボタンの方が価値があることを習った。精神は重大なものと思われず、重要なのは靴磨ブラシであり、思想でなく訓練である。それはプラトーからゲーテまでの、全文化範囲力よりも、大であることが分った。

学校で教わった祖国の観念は人格抛棄の実際化以外にないということであったのだ。隊内では私的制裁がある。これも権力——軍隊内での階級差——の絶対力である。急激な生活の変化、四囲の激動の中に揺れる青年このため人間が一変してくる。

Wir wurden hart, mißtrauisch, mitleidlos, rachsüchtig, roh—und das gut. (II—S. 32)

我々は疑い深く、同情心はうすれ、復讐を求めたくなり、荒っぽくなった。しかも、このようなことは、よいことであった。

つまるところ野蛮になることが生きる条件の一つになってくる。これが戦場での軍務の内容なのだったのだ。では一体軍隊とは何か、どんな組織で生きているのか、を考える必要がある。フランスのロマンチック時代の軍人詩人アルフレッド・ヴィニー（Alfred de Vigny 1797～1863）は「軍隊の服従と偉大」*Servitude et grandeur militaires*—1835 でつぎのように述べている。

「軍隊が国民中のまた一国民であること、これは現代の弊風である。古代に於てはそうではなかった。すなわちすべての市民が軍人であり、すべての軍人が市民であって軍隊の人間も都市の人間とは異った顔をしていなかった」「近代の軍隊……は国民という大きな筒体から分離した一筒体であり、いわば子供の身体のように、そんなにまで知能に於ては退化し、そんなにまで成長を限定されているのである」「軍隊の服従は無名の囚人の鉄仮面のように重苦しく、無慈悲であり、すべての軍人に一様な、そして冷酷な容貌を与える」「死に対する絶えざる、しかも無頓着な期待、思索と行動の自由の全的な断念、制限せられた野心に課せられた渋滞、富の蓄積の不可能、これらからかえって自由な活動的な階級にも見られない美德が作り出されるのである」（三木治訳 昭和28年刊 岩波文庫）

つまり命令は、私的なものにも及んでも反抗できないような雰囲気を生み出し得ることを示している。それが習性となれば、一個の人間改造が可能となる。この結果レマルクが書いた「……その権力を持ちすぎている。下士の奴は兵隊を、少尉は下士を、大尉は少尉をまるで相手が気違いになるまでいじめることになる」（その3）

この人間関係、単的にいえば誰が誰をどう処置し得るか、どう取り扱えるかは、階級章一つにかかってくる。生殺与奪の権は階級章の上下と比例してくる。その中での生活で兵隊は、たとえ腕一本折っても故郷へ帰る機会を希望するに至る（その4）。それが兵士の心理というものである。レマルクは主人公を通じてかく分析している。それは同時に本能的な生の維持への希求が明確化する。

この兵の心情はドイツ兵だけではない。イギリス兵でも同じであったに

違いない。それは当時のイギリス兵が歌詞に託したつぎの句が物語っている。

わたしは家に帰りたい。／ わたしは家に帰りたい。／ 弾丸をやつらは鳴らし、大砲を奴らはうならす、わたしはもう、ここに留まりはしない。（今津晃著「概説現代史一序章」創元社刊）

兵士の心は戦場での敵味方の別なく同じであったのだ。だが血なまぐさい戦いは、夜となく昼となく続くのだ。軍隊組織はくずれない。そうした生活の中であって主人公ポウルは逆に戦線という渦巻に吸引力を感じてくる。自己の寄りどころは、そこしかないからである。絶望と隣り合わせの心なのだ。

Für mich ist die Front ein unheimlicher Strudel. Wenn man noch weit entfernt von seinem Zentrum im ruhigen Wasser ist, fühlt man schon die Saugkraft, die einen an sich zieht, langsam, unentrinnbar, ohne viel Widerstand.
(III—S. 58)

戦線は僕には気味悪い渦巻であった。静かな流れの中にいてその中心からなお遠くにいても、なおその吸引力は感じられるのだ。多くの抵抗もなく、だんだんと自分の方に相手を引きよせるのである。

渦巻き——巻き込まれれば二度と浮かばれぬ一点ながら不可抗的な力で自己を引きよせ、頭の片隅では危険と思いながらも歩を進める領域さながらの地点。それは戦線である。つまるところ、その意識を生じさせるものは軍隊という強力な組織が呼び起こした帰属意識であろう。

（注）これは現代の企業と人間にも当てはまる点がある。人間個人の価値が、いつしか自己の帰属している企業に左右されているということである。企業の中で一人の人間は小さい歯車にすぎない。その歯車が企業内で機械的な日常生活を送り、それについて不平を鳴らしても、そこから逃れては生活できない。いつしかそこに帰って行く。それどころか、優良企業であればあるだけ、外部に対して自己の帰属企業を誇示し勝ちである。

かくしてポウルの戦線生活は続く。そうした生活の中で人間は温かい心を失った人間獣となってくる。

…wir kommen in die Zone, wo die Front beginnt, und sind Menschentiere geworden. (III—S. 60)

前線地帯にやってきた。そして人間獣になってしまった。

このとき兵隊は戦線を「歩く」人間となりその隊伍は非人間的隊伍ではない。

Eine Kolonne—keine Menschen. (IV—S. 61)

縦隊である。だが人間ではない。

しかも敵味方とも同じ生存条件の下に生きているのだ。そこに住む人間は自然と動物の間に住むほかない。そこは民衆が無理無体に味わせられる世界苦の現出場といえよう。では自然と人間と動物との調和を求めるのだろうか。ただ苦悩しているにすぎない。つきつめれば、そこには人間生存の本源的な意味を問うものさえ伏在する。かつてゴヤは「人間は死ぬものと決っているが、その生の意味は」と問うた。そして「戦争の惨禍」を絵筆で示したが、そのキャンバスには人間苦悩と生の姿がそのまま表出された。戦争の怨霊と人間の苦悩が鮮やかに描き出された。平常人はそれを画かれた狂人と見做すだろう。では平常人が自分自身の威を、その崖淵の場に置き換えて凝視したらどうであろうか。戦争の中の人間がいかにも人間行為から逸脱していても、その絶対絶命の境の人間を嘲笑できぬのではないだろうか。

かつての日中事変時の詩人兵士桜井貞光は「宗教は兵には遠し／福音も輪廻も」（「哀れ娘子軍」）と記し、また同じく田辺利広（陸軍伍長，昭和16年中国戦線江蘇省で戦死。26歳）は「戦線日記」に「笑い顔で殺している兵隊。3番目が目をはらし、いままた殺される予感におののいている。……生も死も、このあたりでは、いま叩きおとされた梨の実とどこにちがいがいるのだろう」と苦悶の情を綴っている。これとて「命令」一下直線的に動く兵の内奥の声なのである。命令——これこそ絶対的存在となって生きものになり、ひとりで歩いているのが前線なのである。前線にある人間の言葉を集約すれば命令に対するイエスカノーである。だから上官はいう。

“Wollen Sie meinem Befehl Folge leisten oder nicht?”

(III—S. 86)

君、予の命令を遂行する意志があるか、どうかなんだ。

戦争小説に命令はつきものだが、この作品もまた同様である。戦場では生も死も命令とつながる。命令が一本立ちをして人間を動かすそれが現実なのである。それを繰り返していると、いつしか命令を待ったあとで動きだすほかない人間が形成される。自律性が喪失される。規格化された人間が誕生する。こうした命令の前にバネ仕掛けのように動く生活を繰り返す戦場には徴発された軍馬もいる。馬にも弾丸は遠慮しない。兵士は物言わぬ「戦友」である馬を憐れみ、それに人間的な眼を注ぐようになる。

Das sind die verwundeten Pferde.....Einem ist der Bauch aufgerissen, die Gedärmen hängen lang heraus. Es verwickelt sich darin und stürzt, doch es steht wieder auf....“Möchte wissen, was die für Schuld haben”....“Das sage ich euch, es ist die allergrößte Gemeinheit, daß Tiere im Krieg sind.” (III—S. 68)

傷ついた馬。腹は裂け腸が長く下に垂れ下っていた。それがからまって馬は倒れた。が、また起き上った。「馬に何の罪があるものか知りたいものだ」…「俺は言いたいよ。馬を戦場に連れてくることなんて全くあきれたことだとなあ—」

(注) 戦場の軍馬については二〇三高地（日露戦争）の激戦を書いた桜井忠温実録戦争小説「肉弾」にもつぎのように書かれている。「惨又た惨なる戦場にて、殊に哀れにして、目を惹くものは、或は傷つき、或は斃れたる軍馬である。……而して毫も其の苦痛を訴えざるのみか勇みに勇みて、兵児の志気を鼓舞したのである。……敵の砲弾が腹部に命中して臓腑が露出したに拘らず、それを引ずりながら砲車を索いて砲兵陣地へ駆け上がった。……畜生に生れた悲しさには、傷つけど訴ふる能はず……死して又葬られず……」（8章戦後の南山—原文のまま）

軍馬にも「あきれた世の中」の一端が降りかかる。それに戦場には毒ガスがまかれる。主人公ポウルの戦友が「毒ガスだ…」と伝える。それを吸った兵は「焼けただれた肺が少しつつ崩れ死んで行く」「若い奴が死んで

行く」が、その若い奴をそこまで育てるには20年の歳月がかかっている。一方、小銃、弾丸や毒ガスは短期間に生産され輸送されて、20年の歳月をかけた人間を消して行く。青春が散る。それは命令一つで左右された生命である。人間、馬を動かす命令。ではこの命令の所在と責任とを一体どう結びつけたらよいであろうか。

（注） トルストイの「戦争と平和は」戦争文学のカテゴリーには入るまいが、それにつぎのような個所がある。「この命令する人間と、命令される人間との関係、まさしくこの関係が、権力と呼ばれる観念の、本質を組織するのである」（原久一郎訳 集英社刊 第二巻 644頁）

つまり円錐形の形をした軍隊にあって責任者は最高の命令者となる。とすれば責任はその命令者に帰着する。こうした図式からすれば責任追及は勲功に輝く將軍になる。ところで、この形式で責任を追求するのも必要だが、いかに駆り出されたとはいえ、他国の兵に対しては將校、下士官、兵ともに加害者となって戦争を遂行するという自己反省と内面責任を問う姿勢も不可欠であろう。そうでない限り人を説得するだけの反戦思想とはなり得ない。戦後、日本における戦犯追求のとき、自己を一片の罪もない完全な人間として被追求者と対立したのは、かかる点から反省するに足る。でなければ裁く者も裁かれる者同様、傲慢な硬直した思考しか所有していないことになる。この思考形態は、公害を完全に企業の責任のみに転化し、その企業内での自己の心は無汚であるとする発想に通ずる。

Ⅲ

予期もしないような数多くの戦場体験を経て主人公ポウルはある感懷をもつに至る。

Wir sind Flüchtende. Wir flüchten vor uns. Vor unserem Leben. Wir waren achtzehn Jahre und begannen die Welt und das Dasein zu lieben; wir mußten darauf schießen. Die erste Granate, die einschlug, traf in unser Herz. Wir sind abgeschlossen vom Tätigen, vom Streben, vom Fortschritt. Wir glauben nicht mehr daran; wir glauben an den Krieg. (V—S. 91)

僕らは逃避者なのだ。自分たちの前から、生活の前から逃避していた。僕は18歳で、この世界と、その実人生を愛しはじめていた。それに向って

銃弾を発しなければならなかった。その第一発は僕らの心臓に当たった。僕らは仕事、努力、進歩から断絶されてしまっていた。僕らはそんなのを信じない。戦争のみを信じた。

世の矛盾をハダで感じながらも、その他に生きる場所がないという断腸の思いがある。その生きている所では偶然が事を決する。

Über uns schwebt der Zufall. Wenn ein Geschöß kommt, kann ich mich ducken, das ist alles ; Dieser Zufall ist es, der uns gleichgültig macht. (V—S. 103)

頭上には偶然がある。弾丸がくれば首をちちめる。これだけだ。偶然が全部と思えば、それさえどうでもよいことになってしまう。

Und jeder Soldat glaubt und vertraut dem Zufall.
(V—S. 104)

すべての兵隊は偶然を信じる。またそれをたのみにもする。

この「偶然」についてはプロシャの将軍クラウゼヴィツ Karl von Clausewitz (1780～1831) も、その名著「戦争論」Vom Kriegeの中で「戦争ほど不断に、かつ、あらゆる面で偶然と接触するものはない。……そこには的確に予知しえないものがあり……」(淡徳三郎訳・徳間書店刊・第一節・戦争の性質について)と書いている。

その偶然に身を任せるところには一種の諦めがある。と同時に退廃も潜む。かかる心境は絶望と交叉する。そして鉄製品は何でも兵器化する。円匙も武器となって敵兵の腮(あご)を突く。これこそ人間でなく獣の姿だ。人間的感情を強いて欠陥にしなければならぬ。人間の姿をとった猛り狂った一匹の獣とその集団となる。

Aus uns sind gefährliche Tiere geworden. Wir kämpfen nicht, wir verteidigen uns vor der Vernichtung..... wir haben eine wahnsinnige Wut, wir liegen nicht mehr ohnmächtig wartend auf dem Schafott, wir können zerstören und töten, um uns zu retten und zu rächen..... Käme dein Vater mit denen drüben, du würdest nicht zaudern, ihm die Granate gegen die Brust zu werfen! (V—S. 116～117)

我らはみな危険な野獣となった。戦わず、圧殺に対し防衛する。狂的な憤怒があった。断頭台上で力なく死を待つことはない。我らは破壊し、人殺しをする。というのも救い、かつ復讐するためにだ。よしんば君の父が奴らと共に来るならば、ためらうことなく、父の胸板めがけて弾丸を射つだろうよ。

人間放棄の人間だけが残る。人間であることを捨て切らねば生きられぬ世界である。「戦争、戦場という魔法で人を殺すことができるのだ」（その6）。この痛苦無上の体験から生じた人間とは――

Wir sind verlassen wie Kinder und erfahren wie alte Leute,
wir sind roh und traurig und oberflächlich—ich glaube,
wir sind verloren. (VI—S. 126)

子供のごとく捨てられ、老人のような経験を重ね、粗暴で、悲しみに沈み、上っつらだけの人間になった。人間を喪失したのだ。

しかしその姿も一般にはなかなか理解でき難い状況が生ずる。

(注) 「麦と兵隊」で日中事変当時に脚光を浴びた火野葦平は「私は兵隊となつて、戦場に投げこまれると、その戦争の惨禍、残忍さに眼を掩った。私が『麦と兵隊』の序文の中に「私は戦争の最中であつて言語に絶する修練に晒されつつ」と書いたのは、その凄惨さに対決した私の精神上の苦痛を告白したものであった」と言った。しかも「戦争のあらゆる姿を書きたいと思った。……その一切が封じられた」と当時の軍検閲の状況を伝えていた。（桑島玄二「兵隊の詩」から）

この恐るべき前線から一時帰郷することもある。ポウルにもその機会が与えられる。突然わが家の前に立った息子を見て母は「負傷したのか」とポウルの身体を探るような目つきで眺める。ただ子供の安全をのみ願う母の姿がここにある。そして主人公は町にビールを飲みに行くと、そこには「理解できない、羨みかつ軽蔑する人間」がたむろしているのだ。金鎖を軍資金として寄付し、その代償にもらった鉄時計の鎖を胸に下げた重役は、膨張論を放言してはばからない。

..... ganz Belgien, die Kohlengebiete Frankreichs und große Stücke von Rußland. “Nun macht mal ein bißchen vorwärts da draußen mit eurem ewigen Stellungskrieg.

Schmeißt die Kerle raus, dann gibt es auch Frieden.”....
“...Sie tun ihre Pflicht, Sie setzen ihr Leben ein, das ist
höchster Ehren wert——” (VI—S. 169)

「全ベルギー，フランスの炭田地域とロシアの大きな地域を取るのだ」…
「君らはいつでも陣地戦を続けずに前に少しは進め。奴らを倒せば平和が
くるのだ」「命を惜しまずその任務をつくす。これこそ最高の 栄 誉 であ
る」

この重役の利害は戦争の利害と一致しているのだ。これはドイツの交戦
国フランスでも同様であったのだ。

ロマン・ロランは言っている。「新興成金たち自身，各自の努力によっ
てでなしに，投機によって富を獲得したのだ。それゆえ，勤労の習慣（ま
たは追憶）がアメリカの億万長者に与えているような精神的背骨をもって
いない彼らは，早急に，あらゆる種類の変態に結びついたネロ的な様相を
呈しようとしている」（ロマン・ロラン日記Ⅲ 228頁 みすず書房）

では主人公ポウルたちの見た国家とは何であったか，三人の兵士の話が
ある。

“Staat, Staat”....“Feldgendarmen, Polizei, Steuer, das ist
euer Staat. Wenn du damit zu tun hast, danke schön.”
“Weshalb ist denn überhaupt Krieg?” “Es muß Leute
geben, denen der Krieg nützt.”
“Dem Kaiser nützt er doch auch nicht. Der hat doch alles,
was er braucht.” “einen Krieg hat er bis jetzt noch nicht
gehabt. Und jeder größere Kaiser braucht mindestens einen
Krieg, sonst wird er nicht berühmt. Sieh mal in deinen
Schulbüchern nach.” “Generale werden auch berühmt durch
den Krieg....“Sicher stecken andere Leute, die am Krieg
verdienen wollen, dahinter” (IX—S. 204～205)

「国家とは憲兵，警察，税金。それだ。それだけのものならもう沢山だ」
「戦争なんぞ，一体どうしてあるのだろう」「戦争を利用する連中がいる
からだ」…「カイゼルとて儲けにはならぬのだ。それが全部だ。」「それはど
うか。どこのカイゼルだって戦争をしないと有名にならぬのだ。お前の学
校の本を見てみろ。」「将軍も戦争で有名になるんだゾ」…「何か隠れている

のは事実だ。戦争で得をしようという連中がその背後に隠れているのさ」

寸鉄人を刺す鋭い言葉のやり取りと言えよう。

（注1） 第一次大戦勃発前の政治情勢、ひいては国家のあり方についてはつぎの点も参考になると思われる。「カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルグのような戦争反対者もいたが、これはごく例外であった。……独占資本とユンカーの世界制覇の夢をかきたてたこの大戦争に国民のあらゆる階層がほとんど一体になって突入した」（前掲「ドイツ史」同章）

（注2） 「戦争による怪しからぬアメリカの儲け。連合軍が注文した軍需品は6億ポンド（150億ドル）と見積られる。……これらの莫大な注文はアメリカ産業を活気づけ、脅威だった経済危機を遠ざけた。……最高の犯罪は、これらの中立者が、自分の良心を休めるために、やんわりと、偽善的に平和を説きながら、ヨーロッパ虐殺の長続きを当てこんでいることである」（ロマン・ロラン日記Ⅲ87頁 みすず書房）

（注3） 「1914年（大正3）第一次大戦がおこり、わが国は連合国の一員として参加した。当時のわが国は不況の慢性化の傾向をあらわしはじめ、対外的には年々の輸入超過と外債の利払いのため所有正貨は激減し……ところが大戦はわが国の国際収支を一変せしめた「大正新時代の天佑」（井上馨）であった。……1917年9月末には正貨所有高は10億900万円になり……」（長 幸男「昭和恐慌」岩波新書）

（注4） 「そして外部の敵に対して全てこういう大砲や銃を整備した金持や権力家らは自分達の深謀遠慮を喜びました。何故なら、今や国の内部に敵があり、その方が恐らくもっと危険なのだと思われたからでした。」「多くの人手と多くの機械を働かせることが一刻も早ければ早いほど、一層早くお金も山積することになります」（H. ヘッセ芳賀檀訳「戦争と平和—国家—1918. 12月。83—84頁 人文書院刊）

一方、戦場にあっては敵対意識を超えた兵士間の同一感情がある。交戦国各国が敵国に対する憎悪の念をかき立てる宣伝とは別世界のような人間感情だが、作品の第8章の一節にそれに言及した個所がある。フランス兵士の屍に向って「許してくれ……僕がこの武器を捨ててしまえば同じ僕の兄弟になれるのだったのに」と涙する。つまり「同じ苦痛を分け合う」という感情である。第一線に戦う人間の胸を貫く共感なのだ。

（注） 第二次大戦中の独ソ戦で、敵の負傷兵が戦車にぶら下って息も絶え絶えになっているのを見た独軍の戦車兵が「死より他に彼の苦痛を救う道はない」

と決して、その瀕死の兵を引撃する場面がある。これとて、同様な戦争に駆り出された人間相互交流感情の一情景であろう。

Aus der Luke hing ein Körper, der Kopf nach unten, seine Füße waren festgeklemmt und brannten bis zum Knie. Der Körper lebte, der Mund stöhnte. Er müssen entsetzliche Schmerzen gewesen sein. Und es gab keine Möglichkeit, ihn zu befreien. Selbst wenn es diese Möglichkeit gegeben hätte, wäre er doch nach Stunden qualvoll gestorben. Ich habe ihn erschossen, und dabei liefen mir die Tränen über die Backen. Nun weine ich schon seit drei Nächten über den toten russischen Panzerfahrer, dessen Mörder ich bin.

(Letzte Briefe aus Stalingrad, C. Betldsmann, 同学社「戦場より」2—6頁)

IV

ポウルは連戦中に負傷し野戦病院に入る。病院で見るのは正に戦場の残忍性の具体的集中に他ならなかった。レマルクはこれを「戦争そのもの」として活描している。

Im Stockwerk tiefer liegen Bauch- und Rückenmarkschüsse, Kopfschüsse und beiderseitig Amputierte. Rechts im Flügel Kieferschüsse. Links im Flügel Blinde und Lungenschüsse, Beckenschüsse, Gelenkschüsse, Nierenschüsse, Hodenschüsse, Magenschüsse. Man sieht hier erst, wo der Mensch überall getroffen werden kann.

Zwei Leute sterben an Wunderstarrkrampf. Die Haut wird fahl, die Glieder ersarren, zuletzt leben—lang—nur noch die Augen. unter die Wunde wird ein Becken gestellt, in das der Eiter tropft. Alle zwei oder drei Stunden wird das Gefäß geleert. Andere Leute liegen im Streckverband, mit schweren, herabziehenden Gewichten am Bett. (X—S. 259)

一階下の病室には腹、背髄、頭部銃創と両手か両足切断患者がいた。右側の病棟には腿傷患者、左側の棟には盲人、背部銃創、腰骨銃創、関節、肝臓、睾丸、胃腹部貫通銃創患者がいた。これほど弾丸が当るものだと始めて思えた。……二人は瘻れんで死んだ。皮膚は灰色となり、肢足は硬直しそして、長いこと生きているのはただ眼だけだった。……傷口の下に当て

がった鉢には膿がポタリポタリおちた。二、三時間ごとに、その容器は空にされた。その他の連中は、寝台の端に下に引張るために重い鉋をつけていた。

〔注〕 先述の桜井忠温も「肉弾」で「頭部を撃たれて精神に異状を呈した者」……軍医がそれを引き押へる。……」「右からも左からも迎も助からぬから早く殺して下さいと頼むものがある」（繃帯所）と修羅場の相を領っている。これが海戦ではさらに凄絶である。日露戦争当時の日本海戦の実録「此一戦」には「胴が真二つになったり、首や手足が千切れて飛ぶ位は敢て珍しくない」「又一水兵は顔面は押し潰されて扁平となり……両脚を奪われたるもの、一腕一足を失いたるもの軀幹両断したるものなど惨状目も当てられぬ光景を呈した」（水野広徳著 「此一戦」—日本魂 その一）（ともに原文のまま）と描写している。なお「此一戦」の著者水野広徳（当時海軍少佐）は第一次大戦後外遊しているが「残忍なる殺戮の状を見て戦争否認の態度をとり、また敗戦ドイツでは *über alles* を誇ったあとの悲惨状態を見て軍国主義侵略主義の幻滅を感じ、軍備撤廃論を述べるに至っている」（改造社版戦争文学集 462—463頁）

第二次大戦からは兵器の殺傷力も飛躍的に高くなっている。前線でもロケット砲、火焰放射器の使用による残酷さは皆殺し兵器に近い状況を呈する。つまりゼノサイド様相の到来なのだ。さらに国内での爆弾投下の負傷もある。広島原爆で負傷入院中に死亡した峠三吉（詩人1912—1953）は「飯包帯所にて」と題しつぎのように吐露している。「何故こんな目に遭わねばならぬのか／…／何の為に／なんのために／そしてあなたたちは／すでに自分がどんな姿で／にんげんから遠いものにされはてて／しまっているかを知らない／（「原爆詩集」）

主人公が20歳の若さで知った人生。それは絶望と死と不安。そして無意味さであった。では万が一生き残ったらどうだろうかと考えて自問自答する。

Ich sehe, daß Völker gegeneinandergetrieben werden und sich schweigend, unwissend, töricht, gehorsam, unschuldig töten. Ich sehe, daß die klügsten Gehirne der Welt Waffen und Worte erfinden, um das alles noch raffinierter und längerdauernd zu machen. (IX—S. 260)

どの国民も向き合わされ、黙々とし、何も知らず、馬鹿のように従順で、そして罪もなく殺し合った。世界の利口な頭脳が武器と言葉を発見し、全てを巧妙に偽装し、戦いを長引かせているのを知った。

戦争とは？ 組織対組織の最も大きな対立。その戦いの本態は？ 何が問題か？ 誰が誰をどうしたのか——ということになってくる。

(注) 戦争の本質を抉り出した、B. プレヒトの「肝っ玉おっ母とその子供たち」の最終場面では肝っお母が歌う歌詞にも戦争の内実が含まれている。

Mit seinem Glück, seiner Gefahre
Der Krieg, er zieht sich etwas hin.
Der Krieg, er dauert hunder Jahre
Der g'meine Mann hat kein Gewinn.
Ein Dreck sein Fraß, sein Rock ein Plunder!
Sein halben Sold stiehlt's Regiment.
Jedoch vielleicht geschehn noch Wunder:
Der Feldzug ist noch nicht zu End!

(Mutter Courage und ihre Kinder-12)

運、危険とともに戦争は続く。戦争が100年も続いたとしたところで下々の者に得はない。汚んこの面で上衣はボロだ。連隊長は兵の給与の半分をかすめとる。何か奇跡がおきたとしても遠征は終わらない。

こうした場所では、も早や教養など入り込む余地はなくなっている。

Die Unterschiede, die Bildung und Erziehung schufen, sind fast verwischt und kaum noch zu erkennen.....Es ist, als ob wir früher einmal Geldstücke verschiedener Länder gewesen wären; man hat sie eingeschmolzen, und alle haben jetzt denselben Prägestempel. (XI—S. 266~267)

教養、学問が作り出した差別は消失した。……われわれは言うならば以前は各国の貨幣だった。ところがその貨幣は一緒にとかされてしまって、誰もが今では同じ鑄造貨幣となった。

人殺し場では教養とか学問は無用の長物化する。教養など仮象でしかなくなる。教養ある人間といっても、その中に非人間的なものは存在する。その事実とは極限の場で顕現する。教養は何ら特技ではなくなってくる。ただ単なる自己満足にしかすぎなくなる。単なる物知りの人生は無教養と大差ないのである。何か大きな権力に呪縛された生活しかないのだ。そこでは主体の自己展開は不可能に近い。かかる意識を拡大再生産する戦争。それをレマルクは否定している。だからこの作品がヒトラーにより、発禁とな

り、本人はアメリカに亡命させられるに至ったのである。

（注） ストラヴィンスキーのバレエ音楽「兵士の物語」についてアドルノは「これ（兵士の物語）はストラヴィンスキーの作品の真の中心であることが分る。主人は「ひたすら瞬間のために生きよ」という戒律に反するがゆえに破滅する。記憶における経験の連関は、自己滅却によって得られる自己保存の不具戴天の敵と見なされる」（渡辺健訳「音楽の哲学」 239頁 音楽之友社刊）

V

戦争が長期化するにつれドイツ国内の経済的逼迫は前戦にも影響し「食事は悪くなり」（その11）「ドイツの軍用パン 1 個に対し敵方は肉の缶詰50個を持っている」（同）——アメリカの参戦は開戦後3年後の1917年4月2日——のに拘ら「ずドイツ国内の製造工場の持主は金が出る」（同）

ポウルが見たのは現代戦争の一つの顔なのである。戦争という国家の至上命令、聖戦と名づけられるものの双面がここにある。この両面はいわば戦争国家の本体とでもいえよう。そうして兵器生産と人間の関係が戦争遂行の過程で鮮明になってくる。

（注） フレッドクックは米誌「ネーション」 1961. 10. 28 特集号・Juggernaut —The Warfare State に書いている。（同文は笹川正博訳で「戦争国家」の表題で、みすず書房から刊行されている。引用は同書による）「……兵器が軍人を支配しはじめたのだ」（24頁）「戦争ごっこの場合には業界だけに何十億何百億ドルというカネが転がり込む」（91頁）「一口に云えば戦争は金儲けになるということだ」（193頁）極楽に行くためジャガノート（インドの神話の山車）に喜んでひかれる人間は極楽往生はなくとも、「戦争国家」というジャガノートの車輪は損傷なく前進できる。それには第一線に兵士を繰り出さねばならない。

勇躍祖国を後にして前線の兵が負傷して入院すれば、その野線病院は第一線兵士の補給源となる。「浅い傷」と診断されれば前線追及の命令が下る。その判定者は軍医である。一軍医は断ずる。「足が少し短くとも前線へ行ける」（その11）。軍医は人間の生死の岐路を押えている権力所有者となる。しかし、この軍医が師団に所属している場合、師団長命令で入院患者中の前線追及可能負傷者に第一投入線人員が割り当てられることにな

る。つまり軍医も命令遂行者の一人であると同時に、判定者でもある。そして早期退院者は、ある場合は勇敢な軍人と讃美され、別の面では強制的に退院させられ再び死地に赴かされたことになり得る。こうして人間の不幸は病院では軍医の手にゆだねられることになり、その軍医はさらに上級者の命令を受領して動いている医官にすぎないことになる。命令はここでも生きて人生をゆすぶる。

(注1) 戦記「戦死」「全滅」「憤死」「インパール」などを書いた高木俊朗氏は「戦争の真実を書きとめ、書き残さねばならぬ。……戦争に対して無知、無神経になれば、人間はまたあの不幸と悲慘を繰り返すだろう」(「全滅」あとがき)と言明しているが、同時に「殺人罪に該当する上官の犯行が、軍隊の名で遂行され、ごまかされたことは許されない」(昭和52.12.8 朝日新聞「戦死」の真実を求めて)と憤っている。

(注2) 日本では軍歌を例にとっても勇敢、悲愴、忠勇、義烈、古今無双、英雄といった浪花節的発想が多かった。文学でも国木田独歩の「愛染通信」に見る非戦的内容、田山花袋の「第二軍従軍日記」「一兵卒」などがあるが、これもさきのルポルタージュ「肉弾」「此一戦」とともに当代文学の流れから孤立していた。それは余りに作者の主観が強すぎた点にも問題があるろう。さらに戦争映画にしても日本人の戦争の受けとめ方は他民族に理解できぬところが多いということも一考に値する。例えばルース・ベネディクトはこれをつぎのように説いている。「日本人の観衆には画面に現われる人物がすべて全力を傾注すれば……それで充分である。だからこれらの映画(日本の戦争映画)は日本では軍国主義者たちの宣伝の具になった。……日本の観衆はそれを見ても決して反戦思想を抱くようにはならない。とということを心得ている」(長谷川松治訳「菊と刀」下巻)。
しかし高木俊朗は「戦死者を美化すれば、それは上級者が自己の責任をごまかすことであり、時には歴史を誤らせて国民の将来を不幸にする」という観点に立って戦争の実態について筆を進めており、単なる美談・悲痛・犠牲などを強調したような在来の戦記とは質的な差をつけている。

筆者レマルクは退院命令を受けた兵士に、こう言わせている。「私は義足をはいているが、これで戦線に行って頭を射たれたら木の頭をこしらえる」。痛快さの裏にあるドキリとさせられる心情と命令の苛酷さが読みとれる一句である。疎外された人間のいつわらざる言が、反射的にとび出しているのだ。人間侮辱への怒りが、何回も入れ替えの効く義足を借りて肺

腑をついて出ているのだ。空虚なおどけではない。人間精神を空洞化したものへの痛烈な一撃とも思える。だが兵士のこのユーモアも瞬間にして残酷な現実へ急転する。兵の眼にある映るのは修羅場でしかない。

Granaten, Gasschwaden und Tankflottillen—Zerstampfen, Zerfressen, Tod. Ruhr, Grippe, Typhus—Würgen, Verbrennen, Tod. Graben, Lazarett, Massengrab—mehr Möglichkeiten gibt es nicht. (XI—S. 277)

砲弾。毒ガス、タンク隊——踏潰、噛破、死。疫痢、流感、チフス——絞殺、焼殺、死。塹壕、野戦病院、共同墓地。これ以外の何ものでもない。

西部戦線は塹壕戦であった。一進一退のあと事態はドイツ側に好転せず、ポウルの中隊長も戦死する。ポウルの同クラス7人のうち主人公だけが生き残る。そのころ誰もが休戦を口にする。そののみか「平和がこなければ革命があるだけだ」（その12）と論じ合うに至る。それでも戦いは続く。ポウルは「自分に残ったものは何なのか」と自己をさいなんでくる。その切断された青春の心象をレマルクはこう書いている。

Wir sind überflüssig für uns selbst, wir werden wachsen, einige werden sich anpassen, andere sich fügen, und viele werden ratlos sein—die Jahre werden zerinnen, und schließlich werden wir zugrunde gehen. (XI—S. 286)

自分たちは自分自身に対してすら、余計者になってしまった。僕らは成長するだろう。ある者はうまく順応して行くだろうし、他の者は身を処して行くだろう、けれども多くの者は、途方にくれるに違いない、そして歳月は消え、我々は滅び行くほかない。

ここにある「虚無」と「詠嘆」。これは戦いにつきものなのだろうか。太平洋戦争に出征した日本の出陣学徒の手紙も、この種の詠嘆が随所に見られる。一例を、沖縄特攻隊で戦死した吉野文平（第三高等学校—旧制—文科昭和18年12月入隊 20年4月戦死）の手記に見てみよう 「死ぬってことが重荷になるなんて／今夜に限って／こりゃいったいどうしたことだ／重荷というんじゃないくて／何というか／とっても嫌らしいんだ」（『きけわだつみの声』第二集から）

「滅び行くほかない」と観念したポウルは皮肉にも全戦線が平穩であったある日に流れ弾丸に当って戦死する。この死は同作品の第一章に「こういう連中、つまり自分たちの都合のよい方法で最もよいことができると確信している連中の破産がある」と書いているのに対し、それと逆な光を当てた一兵士の戦死であろう。

Ⅵ

レマルクは「西部戦線異状なし」のあと、続篇「帰り行く道」Der Weg zurück (1931) を書いている。これは復員兵心身とも疲れ果て、ボロ服を着て空腹を満たそうと、あるレストランに入る。そこには前線で想像もできなかった山海の珍味を前に、金持ちが悠々と自分の人生を楽しみ「平和」に食事をしている場面が疲れ切った帰還兵の目に映ってくる。この作も単なる報告文学、ないしは戦争忌避の平和主義小説とばかりはいえないような気がする。戦争は終っても、なお人間の奥にひそむエゴイズムが、それをむき出しにしていること、それを許す世間があることを展開しているのである。

つまり戦争は終了しても、それで万事が片づいたのではないということである。ヴェルナー・ケーギは「ヤコブ・ブルクハルトの戦争体験—1866～1871」に「戦争の時代に対し新しい精神は備えなければならぬ。教養ある人々にとって、なつかしかった何と多くのものを彼らは精神的贅沢としてかなぐり捨てねばならぬことになるだろう。そして我々とは違った何たる独特の成長を新しい世代は遂げることでしょう」とするブルクハルトに対し「戦争の時代というのがブルクハルトの最大の誤謬なのではなくて、より深く根ざした新文化を期待したことが彼の誤りだった」（『みすず』1973年7月号46～60号）と言っている。なおブルクハルトは「ドイツ帝国はきっと悪しき結末を遂げる」と門人たちに言っている。（同誌）

ドイツでは第一次大戦後の経済不況、人心の退廃とエゴイズム、廃墟の中にあって1919年7月ドイツ・ワイマル共和国が成立する。また休戦をまたずにロシアにレーニンの指導下に社会主義国家が成立した。この歴史的

事実、第一次大戦が世界史的立脚点から見たとき、大きな史的転換点であったこと、それが現代史の始まりであったことを現実で示してくれている。アメリカの歴史学者マーティン・ジェイ（Martin Jay, 1944～）は「第一次世界大戦がもたらしたもっとも広汎な変化の一つは、少くとも知識人への影響に関していえば、社会主義の重心が東に移ったことであった。……残された選択は……第一には穏健な社会主義者とかれらが新しく創り出したワイマル共和国を支持し、革命を回避してロシアの実験を冷笑することである。第二には……新たに結成されたドイツ共産党に入り、ワイマルのブルジョワ的妥協を崩り掘すために活動することである」（社会研究所 Institut für Sozialforschung —その創設と第一次フランクフルト時代 I）と指摘している。

ワイマル共和国はヒトラーの前に崩れ去ったのは周知のとおりである。けれども戦争は個人の価値観を根本的に変える一つのモメントではあった。この意味からも戦争文学の役割りは大きい。

この「遺産」をどうするか。一つの例をあげてみよう。B. プレヒト（1898～1956）は1952年7月、ウィーンにおける「世界平和評議会への呼びかけ」でハンブルグ爆撃を例にとってつぎのように述べている。

Die Beschreibungen, die de New Yorker von den Greueln der Atombombe erhielt, schreckten ihn anscheinend nur wenig. Der Hamburger ist noch umringt von Ruinen, und doch zögert er, die Hand gegen einen neuen Krieg zu erheben. Und doch wird nichts mich davon überzeugen, daß es aussichtslos ist, der Vernunft gegen ihre Feinde beistehen.

主張しようとする要点は、世人は戦争による廃墟、傷手を忘れ新しい戦争について抗議するのをためらっている、のではないか。だが、人間に本当の理性があるならばそれは、破局から何も学ばない、というようなことであってはならない。そうしたこへを中止すること、それが敵を前にした理性であるというのである。破局を運命としてとらえるのではなく、教治を自分の対象としなければならないということでもあろう。そこに理性があ

るとしているのだ。全般的な人間精神の貧困化に面したときに理性に味方すること、これは一つの文化遺産をどう継承するかの問題につながる。

一つの戦争文学。それをどう読み、どう答えるか。ただ自分だけが誠実であったという事だけで慰めようとするなら、それは喜劇であり、その体験は無意味となろう。体験の重み、その一つの現われとしての戦争文学。その価値は、それを読みとる人間の意識と、過去に学び、悲惨さに教えを乞う人間の意志一つにかかっていると言えよう。これはさらに広義では真理への応答となるであろう。

(付記) 第一次大戦は1917年6月に成立したヴェルサイユ講和会議によって正式に休戦となったが、これは同時に世界の再分割であった。戦勝国は自分に好都合な世界体制を目指した。このため植民地で従属国との対立も拡大したのは歴史の示す通りである。

クラウゼヴィッツは「戦争は教治的やりとりの一部分にすぎず、したがって決してそれ自身独立したものではない」と「戦争論第八篇 作戦計画」で強調している。同著は戦争を語る場合、必読の論であるが、個々の戦争、戦闘論ではないので、これについて述べるのは差し控えることにした。

なお原書は1929年刊 IM PROPYLÄEN-VERLAG/BERLIN によった。同書は刊行時にドイツに留学されていた元九大医学部第一外科医博三宅博教授が同地で求められていたもので、これを同教授からさきに贈られていたものである。ここに改めて三宅博士に深謝する次第です。